（３）東山小学校

学　　校　　長　　太宰　三和
校内研究代表者　　白石　浩美

１．研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」
～友だちと関わり、コミュニケーションの楽しさを体験する外国語活動～

２．主題設定の理由

本校の児童は、全体的に明るく開放的で、与えられた課題には一生懸命取り組むことができる。しかし、自ら学び判断する力や友だち同士関わり合いながら高め合っていくことに弱さが見られ、自分の思いをうまく表現できなかったり、他者とのコミュニケーションをうまく図ることができなかったりする児童もいる。そのため、お互いに理解し合えなかったり、自己主張の強さから相手の主張を受け入れることができなかったりする場面も見られる。

このような実態を踏まえ、平成３０年度より高知県教育委員会による「英語指導教員配置による英語教育推進事業」を受け、研究テーマを「主体的・対話的な深い学びの実現に向けた授業づくり～友だちと関わり、コミュニケーションの楽しさを体験する外国語活動～」と設定し、単元ゴールの明確化（コミュニケーション活動の工夫)、主体的・協働的に取り組める活動の設定、授業スタンダード（東山スタイル・新東山スタイル「Do - Learn - Do Again」）の定着を図るための研究に取り組んできた。

昨年度末に行った児童の外国語活動アンケートの結果では、「英語で友達や先生と会話することが楽しい」８４．０％（目標数値　７０％以上)「英語で自分のことや意見を発表することが楽しい」７２．６％（目標数値　７０％以上）のように目標数値を達成できた項目もあれば、「授業が楽しい」８９．１％（目標数値　９０％以上)、「授業に進んで参加している」８６．３％（目標数値　９０％以上）のように目標数値にわずかに届かなかった項目もある。また、教員の外国語活動アンケートにおいては、「指導案の作成や授業展開の仕方については、理解できている」１００％（目標数値８０％以上）であるにも関わらず、「自信を持って指導している」５７．１％（目標数値７０％以上）の項目が目標達成とはならなかった。授業力チェックリストⅡにおいては、全ての項目で評価の平均値３．２ポイント以上を達成することができていた。

これらの結果から、児童の実態としては、目標数値に届かなかった項目があるものの、他者と進んで関わったり、自己表現ができるようになったりするなど、コミュニケーションの素地ができつつあると考える。また、教員も校内研修の取り組みにより、外国語活動の在り方の理解が深まり、主体的に楽しみながら授業が行えるようになりつつあると考える。

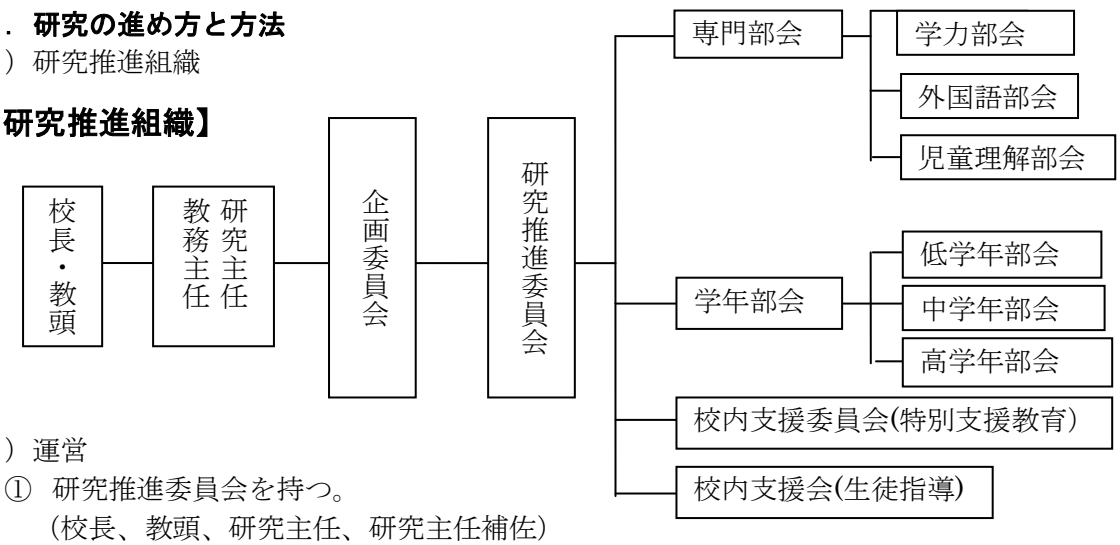
そこで、今年度も、研究主題を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり～友だちと関わり、コミュニケーションの楽しさを体験する外国語活動～」とし、昨年度の取り組みの更なる充実と改善を目指す。具体像としては、『授業中に積極的に外国語を使って他者（友達、教師、ALT 等）とやり取りをすることにより、自分の考え等を形成、整理、再構築し、目的、状況、場面に応じて自分の思いや意見を外国語で伝え合っている姿、またそうして得た知識や考えを次の授業で活かしたい、学校教育外でも使いたいという姿』と位置付け、児童のコミュニケーション力と教師の授業力向上を目指していく。

そのために、これまで培ってきた東山スタイルと新東山スタイル（「Do - Learn - Do Again」）を組み合わせながら、低学年では良質なインプットをできるだけ多く行うこと、中学年から高学年にかけては、単元ゴールを明確にし、「アイコンタクト、クリアボイス、ジェスチャー、スマイル」等の相手意識をもたせながら、多くのフレーズに慣れ親しませていくこと、３つのキーワード「Authenticity(真正性)、Personalization(個人化)、Creativity(創造性)を上乗せしながら単元構想を行い、発達段階に応じた外国語活動の指導方法をより確かなものにし、実践していく必要がある。そして、児童が感じる「楽しい」の質の向上（練習したことをそのまま伝え合う楽しさではなく、これまで学習したことを使ってなんとか相手に伝わった、相手が分かってくれたという楽しさや達成感）を図り、児童のコミュニケーション力を高めるための研究の深化を図っていく。以上のことから、今年度の研究主題を上記のように設定した。

３．研究の進め方と方法

（１）研究推進組織

【研究推進組織】



（２）運営

① 研究推進委員会を持つ。
（校長、教頭、研究主任、研究主任補佐）

② 必要に応じて研究部会を持ち、具体的な取り組みの企画立案を行う。各部において企画された取り組みは、研究推進委員会等の承認を得る。

③ 毎週金曜日に学年部会を開き、取組内容の確認を行う。

④ 校内支援委員会（特別支援教育）を持つ。（月１回火曜日）
（校長・教頭・特別支援コーディネーター・補佐・児童生徒支援・養護教諭・該当児童学級担任・該当学年支援員）

⑤ 校内支援会（生徒指導）を持つ。
（校長・教頭・生徒指導担当・人権教育主任・養護教諭・該当児童学級担任・該当学年支援員）

（３）校内研の持ち方

・研究日は毎水曜日（１５：２０～１６：４５）とする。（第２週…定例職員会）
・研究日は全教職員による全体研修と各研究部による研究部会等を行う。
・研究推進委員会で企画立案し、全体に提案し、共通理解を図り実践していく。

（４）授業研究

・全校研究授業は、外国語活動とする。
・各学年年間１本の全校研究授業を実施する。
・全校研究授業の前に学年部またはブロックで事前に教材研究を行い、全体へ提案する。
・全校研究授業の前に校内研修での模擬授業を位置づける。
・全校研究授業の時の司会と記録は、各ブロック（低・中・高）で行う。但し、研究協議においては、外国語部会が進行する。
・授業参観の視点は事前研究（模擬授業）で決める。その視点に沿って参観・研究協議を行う。
・研究協議で話し合ったことは、各ブロックでまとめる。
・よかった点と課題点を明確にして次へとつなげていく。

４．今年度の取組及び成果と課題

ねらい	○「外国語を用いて、言葉や文化の豊かさや大切さに気付き、人と関わる楽しさ、伝え合う喜びを体験しながら、いきいきと表現しようとする児童の育成」
取組	**成果（○）課題（●）**
◎授業づくり ・「新東山スタイル」の授業展開の方法（Do-Learn-Do Again)、コミュニケーションの要素に加え、Authenticity【真正性】、Personalization【個人化】、Creativity【創造性】を目指す。 ・既習表現を生かし、活動に必然性を持たせ、児童の意欲の持続化と	○東山スタイルが定着し、児童が見通しを持って意欲的に取り組むことができた。 ○既習表現が活用できるように単元構成を工夫すること、１時間の授業の中で中間評価の入れ方や内容を工夫することで、学びに深まりを持たせられた。 ○昨年度までの研究に加え、３つの要素を意識した研究を行ったことで、研究に深まりが見られた。 ●苦手意識がある児童に対しての手立てが不十分であった。

なるように授業を仕組む。	●コミュニケーションの３要素を意識して授業をすることはできたが、個人差があり、外国語活動だけではなく、学校生活すべてにおいて、児童に意識させる必要がある。
◎校内研修 ・新学習指導要領の趣旨・内容を踏まえた小学校外国語活動の授業づくりの研究を行う。 ・Can do　リストを活用・改善することで、単元のゴールにおける児童の姿をさらに具体化し、目指す児童を明確にする。（ビデオ視聴等） ・各学年の単元で学習する英語の表現や英語でのやりとりを全教員で共有する。 ・Do-Learn-Do Again の授業構成を考えていき、１つの単元について全員で教材研究を行う。	○学年部会で検討した指導案をもとに、全教員で模擬授業を行うことで、みんなが同じ立場で研究授業を見ることができた。 ○授業づくり講座に向けて、学年部で協議を行ったり、模擬授業を受けて授業展開を改善したりすることで、中間評価の在り方や目指す単元ゴールを意識した授業構成等の研究を深めることができた。また、中妻先生からの講話でこれからの外国語活動のポイントについての理解が深まった。 ○Can do　リストを活用・改善することで、単元のゴールにおける児童の姿を具体的にイメージすることができた。 ●児童一人ひとりの活動をどう見取るかという評価の点で、ＡＬＴ，ＪＴＥ、ＨＲＴの役割分担を明確にする必要がある。
◎英語力・語彙力向上 ・月一回のイングリッシュタイムを継続し、内容の充実を図る。 （クラスルームイングリッシュ、「Fun Fun えいご」の活用等）	○実践を交えての研修が多かったので、理解しやすかった。 ○授業で使えるクラスルームイングリッシュを提案してもらうことで、実践に活かすことができた。
◎授業の検証 ・振り返りカードの内容を提案し、授業改善を図る。 ・アンケート（児童用・教師用）を年３回（４月、１０月、２月）実施し、実態把握を図る。	○単元の振り返りの枠を設けることで、児童自身も単元全体を振り返り、自分ができるようになったことをメタ認知することができた。また、教師の授業改善に活かすことができ、評価がしやすかった。 ○振り返りカードを活用することで、児童の意欲や関心を把握することがで、授業改善ができた。 ○アンケート結果の分析をもとに実態把握をし、その実態に応じた学習計画を立て、実践することができた。
◎評価の工夫・改善 ・授業づくり講座を通して、新学習指導要領を基に評価の改善を図る。	○今年度の事例開示を受け、次年度へ繰り越す。 ○新学習指導要領の評価規準にそって、指導案を立て、研究授業を実践することができた。
◎小・小、小・中連携 ・「東山スタイル」の情報発信を、研究授業公開やＨＰなどを通して行う。	○ＨＰやオール四万十などで、外国語活動通信についても継続的に紹介することができた。 ●研究授業にたくさんの人が来てもらうための工夫を考える。 ●小・小、小・中の連携として、外国語通信を配布する。